平安和歌における立春詠の展開

隋　源遠
茂野智大

はじめに

二十四節気の冒頭に位置する「立春」は和歌の重要な題材の一つである。立春を意識した歌は早く『萬葉集』に現れるが、『古今集』巻頭歌によってひろく知られるようになったと考えられる。以降の勅撰和歌集においても立春の歌は欠かさず入集し、私撰集や私家集、定数歌集においても、立春関連の詠作は多く見られる。しかし従来、この題材に注目した研究は少なく、個別の歌に焦点を当てた論はあるものの、[1]古代和歌全体を通じて立春詠が考察されることはなかった。中国から伝来したこの節気の概念が和歌においてどのように詠まれ、展開してきたのか。本稿では平安和歌の立春関連詠作を中心に、それ以前としての萬葉歌をも視野にいれつつ、考察する。[2]

なお本稿では、詞書に立春ないしそれと関連する表現が含まれている歌、及びそれに準じる歌を[3]「立春詠」と称する。平安和歌には約三〇〇首の立春詠が現存しており、以下、詞書と歌表現との二つの視点から、これらの作品を考察する。

第一節　「立春」を表すことば

まず注目するのは詞書における「立春」を表すことばである。立春を表すことばには主として以下の三種がある。

まず、「春立つ」である。『古今集』の三例はいずれも「春立ちける日」となっているように、詞書における立春を意味する表現としては最も古い。その中には、「春立ちける日」（『古今集』春上・一など）、「春立つ日」（『後撰集』春上・二など）、「春たちし日」（『惟方集』一など）といったような「春たつ」を一語として使用する例もあれば、「春もたちぬ」（『後拾遺集』雑二・九四三）、「春のたちけるに」（『金葉集』初度本、春・一七など）のような、「春」と「たつ」との間に助詞を入れる例もある。また動詞「立つ」の活用語尾を省略した「春立日」も『躬恒集』の三例を始め、多くの用例が見出だせる。ただし

その場合、「立」の後には必ず「日」が加えられており、「春立」の二字だけの用例は見られない。「春たつ」に後接する語には「日」のほか、「あした」（『貫之集Ⅰ』六八〇）、「ころ」（『道信集Ⅰ』八六）、「こころ」（『実家集』二など）も見られる。「はるたつ」を「立春」の訳語とする考えが一般化する中で、「はるたつ」を日本独自のことばとする説や、漢語「春立」の訳語とする説もあるが、制限の少ない散文（詞書）の文脈における用例を見ると、少なくとも平安朝に至ってからは、「立春」の訳語に等しい位置であることが認められよう。[4]

次は「立春」である。勅撰集での初出は『後撰集』春上・二、私家集では『友則集』一と『貫之集Ⅰ』三二とである。『友則集』は後人編纂のもので詞書の信憑性に難があり、貫之の死後まもなく編纂された『貫之集Ⅰ』の用例が最も早いと考えられる。[5]

時代を下ると、『月詣集』巻一・正月・四に「たつ春の心を」と題する歌が現れる。「たつ春」は他に『俊頼集Ⅲ』六七三、『有房集Ⅱ』一、『実国集』一、『宗家集』一二一、『西行集Ⅰ』（『山家集』）一、『師光集』三一、『小侍従集Ⅰ』三などにも見られる。主流の表現にこそなっていないが、「たつはる」は院政期以降の平安和歌史において、立春を意味することばとして使用されているのである。

最後は「節分」である。「節分」は、本来二十四節気の中のある節の前日を指す表現だが、和歌の中では立春の前日を指す言葉として一般的に使用されている。平安時代の用例を見ると、立春前日以外のものは『伊勢集Ⅲ』五二の「節分のつとめて四月朔みやにて」のみで、そのほかの七例は全て立春前日を指す表現となっている。すなわち『為信集』一九の「節分のつとめて」、『兼澄集Ⅱ』四六の「ふる年に節分のはじめにて侍し日」、『道命集』一一四の「歳内に、節分ある年」、同二九八の「年内に節分する年」、『和泉式部集Ⅰ』三三〇の「節分のつとめて」、『主殿集』一四の「これは節分の夜」、『出羽弁集』九の「師走に節分してしなり」である。このうち『為信集』の例と『和泉式部集Ⅰ』の例は節分の翌日、つまり立春日をさす表現となっているが、それ以外の例に関しても、全て翌日の立春日を意識したものである。例えば『主殿集』の、

これは節分の夜、おとこにとられたる女にやりし

こほりだにとくめるよはのぬま水にむすびてけりなそこのちぎりは

は、『古今集』春上・二の「むすびし水の」を念頭においた作品である。また五句は『順集Ⅰ』一の「今日とくる氷にかへてむすぶらしちとせの春にあはむちぎりを」と用法上の類似も指摘でき、立春を意識した詠作であることが明らかである。

第二節　立春詠の基盤

平安和歌の立春詠を考える際、重要な意味を持つのは『萬葉集』と『古今集』という二つの歌集の存在である。

まず『萬葉集』の意義としては、以下の三点が挙げられよう。

第一に、和語「春たつ」の創出である。「春たつ」ということばは人麻呂歌集歌「ひさかたの天の香具山この夕かすみたな

びく春立つらしも〔春立下〕」（巻十・春雑歌・一八一二）に見られる。この歌ことばの創出によって、暦法の概念である「立春」が和歌の世界に導入されたのである。漢語「立春」を和語「春立つ」に変換することで、平安和歌における立春詠の道が拓かれたと言っても過言ではない。そのことは、二十四節気において立春と同等の重みを持つ立夏、立冬が和語化されていなかったため、それを題材にした歌がほとんど残されていない点からも窺えよう。

第二に、立春詠の風景である「かすみ」と「鶯」との創出である。『萬葉集』一八一二歌において創出された「春の徴としてのかすみ」は、平安の立春詠において最も多く詠まれた景物の一つである。一方、立春の鶯を詠む題材の先蹤歌は、天平宝字元年十二月十八日の節分の宴において制作された三形王の「み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは明日にしあるらし」（『萬葉集』巻二十・四四八八）や大伴家持の「あらたまの年行き帰り春立たばまづ我がやどに鶯はなけ」（同・四四九〇）にまで遡ることができる。[6]

第三に、立春に対する二つの捉え方の創出である。即ち、

A．自然暦の季節感（実景）をもって、具注暦に記された春の正確性を検証するという方法

B．自然暦の季節感を表す景物（想像）を、太陰太陽暦の季節定義の中に位置づけるという方法

である。Aの方法は前掲一八一二歌に見られ、Bの方法は天平宝字元年十二月十八日の節分の宴に詠まれた甘南備伊香の「うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜かすみたるらむ」（巻二十、四四八九）に見られる。この二つの方法は平安和歌の立春詠にも散見される。

立春歌

みわたせばよもの山辺のかすめるを春たちぬとはいふにぞありける

（『教長集』三）

山ざとに春たつと云ふ事

山ざとはかすみわたれるけしきにて空にやはるの立つを知るらん

（『西行集Ⅰ』七）

立春のこころを

はるたつとしらでもみばや天の原かすむは今朝の思ひなしかと

（『小侍従集Ⅰ』一）

立春　清輔

いつしかと春のしるしのみゆるかな三輪の杉はらうちかすみつつ

（『実国家歌合』九）

右の四首はいずれもかすみ（実景）を見て春の到来を認識することを詠んだものである。暦法上の春という知識を排して、実景であるかすみを視認することで春の到来を判断する小侍従歌において、自然暦の季節感を第一義とする姿勢は明白に読み取れる。この歌について『小侍従集全釈』では、『拾遺集』巻頭の忠岑歌「春立つといふばかりにやみよし野の山もかすみて

今朝は見ゆらん」の「発想を逆転し、自分の感覚による春発見を主張する。既成概念にとらわれないでいこうという精神」があると評している。[7]「立春のこころを」と題する歌の中で、立春の知識を排する姿勢をとったところに、この歌の面白みがあると言えよう。

みちのくにに侍りける時、春立つ日よみ侍りける　三朝法師母

出でて見よいまは霞も立ちぬらん春はこれより過ぐるとこそ聞け

（『後拾遺集』二）

左大将実定家にて、おなじ心を

春といへば霞みにけりなきのふまで浪まに見えしあはぢ島山

（『俊恵集』五）

立春

あづまぢや一夜がほどにくる春をいかでさきだつ霞なるらん

（『忠度集』一）

右の三例はBの方法を用いた例である。かすみの発生を立春の到来をもって推測する三朝法師母歌や忠度歌、そして春といえばかすみの発生が思い浮かぶと詠む俊恵歌、いずれも太陰太陽暦の四季観を優先する姿勢を取っている。

このように、古代和歌における立春詠の展開を考える際、『萬葉集』は暦法の概念である立春を和歌の世界に導入したこと、その立春に対応する景物であるかすみと鶯とを提起したこと、立春に対する二つの捉え方を完成したことにおいて、重要な意味を持っている。

そして、平安和歌の立春詠の基調を決めたのは『古今集』である。その最も重要な意義は、立春詠の風景、すなわち「東風解凍」、「かすみ」、「鶯」を規定したことにある。

春たちける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふのかぜやとくらむ

題しらず　よみ人しらず

春霞たてるやいづこみよし野の吉野の山に雪は降りつつ

二条のきさきの春のはじめの御歌

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙今やとくらむ

これは冒頭の元方詠に続く二番から四番の三首である。貫之歌は東風解凍、読人しらず歌はかすみ、そして二条の后藤原高子歌は鶯と東風解凍とを詠んでいる。[8]『萬葉集』の立春風景を継承した「かすみ」と「鶯」とに、「東風解凍」が加わったのである。

この東風解凍詠の論理について、多くの注釈書は『礼記』（月令）という、『顕昭古今集注』に言及された文献を出典として挙げているが、なお疑問が残る。滝川幸司氏が指摘するように、『礼記』（月令）の当該箇所には「立春日」に「東風解凍」が発生するとは書かれていないのである。[9]

孟春之月、日在二営室一（中略）。東風解凍、蟄虫始振、魚上レ氷、瀬祭レ魚、鴻雁来。（中略）是月也、以立春。

原文を見ると一目瞭然だが、月令にいう東風解凍は、孟春月に起きる現象であり、立春日と対応するものではない。貫之歌に見られる東風解凍と立春とを直接に結ぶ論理関係の拠り所は

『礼記』ではなく、内田正男氏が指摘するように具注暦にあると考えるべきであろう。[10]

平安時代の具注暦の姿をそのまま残している『御堂関白記』自筆本を見ると、「立春」を記す箇所のすぐ側に「東風解凍」が書かれていることが分かる。[11]「東風解凍」は七十二候の冒頭に位置づけられるもので、その七十二候と二十四節気との間には、対応関係が存在する。

しかしこの論理関係を和歌の世界に浸透させたのは、やはり白居易の文学である。『和漢朗詠集』にも掲出された「府西池」詩の「柳無二気力一条先動、池有二波文一氷尽開」は『古今集』巻頭歌をはじめ、平安時代の多くの立春詠に影響を与えたと考えられる。なお菅原道真にも「東風解凍」を踏まえた二首の年内立春詩が存し、この題材の漢詩から和歌への継承関係を物語っている。

平安和歌史における立春詠の展開を考える際、『古今集』の持つもう一つの重要な意義は、詞書の中に立春日を明記したことである。一番歌と二番歌との詞書には「春立ける日よめる」という文言がある。いずれも立春日に詠んだものと考えられるが、歌意を吟味すると、実景との繋がりがなく、専ら立春という暦法の概念に関する思索、想像が詠まれていることが分かる。立春日のでき事や、目にした風物ではなく、「立春」そのものが詠作の契機、そして主題となったのである。以降の平安和歌に見られる「立春の心」や題詠の「立春」は全て、この『古今集』における「立春日」の歌を起点とするものと言えよう。

そして『古今集』巻頭歌群の持つもう一つの重要な意義は、「立春」を季節詠の春の巻頭に置くという試みである。「年のはて」を詠む歌を冬の巻末に、「年のうち」の立春を詠む歌を春の巻頭に置くという、太陰太陽暦における年末年始の繋がりからみてやや変則的な配列にはなっているが、以降の平安和歌における季節詠の歌題配列の、一つの手本になったことは疑いがない。以降の勅撰集において元日を巻頭とする動きもあったが、最終的には立春詠が春の巻頭に定まり、それに伴って元日がマイナーな歌題に留まったのも、『古今集』の経典としての地位の確立と密接な関連性があると考えられよう。

立春詠の土台は『萬葉集』において既に作られていたが、それだけでは平安時代の膨大な立春歌群は生まれてこない。立春が平安和歌の季節詠の重要なテーマになりえたのは、最初の勅撰和歌集である『古今集』の影響力によるところが大きい。古代和歌における立春詠の表現基盤は、『古今集』の成立によって整えられたと考えられる。

第三節　立春詠の風景

平安和歌の立春詠は、一部の雑歌、恋歌を除けば、ほとんどの作品は季節詠として位置づけることができるものである。その季節詠の中で最も多く詠まれた自然現象は、東風解凍とかすみとであり、立春の鶯がこれに次ぐ。本節はこの三つの立春風景が、平安和歌においてどのように詠まれていたのかを考察する。

東風解凍詠は『古今集』二番歌と四番歌とによって創出され

た題材である。平安和歌における東風解凍を詠んだ立春詠は、いずれもこの二首を念頭において制作されたものと思われる。

立春日

水の面にあやふきみだる春風や池の氷を今朝はとくらん

（『友則集』一）

立春　顕季

うちなびき春はきにけり山川の岩まの氷今日やとくらむ

（『堀河百首』春・五）

俊成卿家の十首歌中に、立春の心を人人よみ侍りける　源行頼

あふ坂の関ふきこゆる春風に小かはの氷今やとくらん

（『玄玉集』巻四・時節歌上・三六四）

右三首はいずれも『古今集』の東風解凍の表現を明確に踏まえたと考えられる例である。解凍を詠出する傍線部は『古今集』二番歌（五句「いまやとくらむ」）と四番歌（五句「今日やとくらむ」）とを踏まえると見られ、また解凍の主体を第四句に詠み込む点は四番歌（四句「こほれる涙」）に一致する。[12]

天暦御時、御屏風歌、立春

今日とくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを

（『順集Ⅱ』一六四）

この歌の波線部は『古今集』二番歌の「むすびし水を」を踏まえる。東風解凍に「ちとせの春にあはんちぎりを」を加えることで歌の慶賀の色彩がより濃厚になった、晴れの場にふさわしい格調高い表現と言えよう。そしてこの歌から更に次のような歌が生まれる。

堀川院御時に立春の朝に御前にて、今日の心よめと宣旨ありければつかまつれる

君がためみたらし川を若水にむすぶや千世のはじめなるらん

（『俊頼集Ⅰ』六八五）

春立つ日よみ侍りける　新院御歌

うちなびき今日たつ春の若水はたがいた井にかむすびそむらん

（『続詞花集』巻一・春上・二）

「水」を「結ぶ」という『古今集』二番歌の表現に、「若水」という表現が加えられ[13]、歌の公的な性格が一層強化された東風解凍詠である。

また『古今集』四番歌の「鶯のこほれる涙」の解凍を踏まえたものとして、

右大臣家人人に百首歌よませられ侍りしに、読めとありしかば、おなじ題を五首

春きぬと今朝つげわたる鶯は涙の氷まづやとけぬる

（『俊恵集』一〇）

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき、立春をよめる

春たてば氷の涙うちとけて今日ぞなくなるたにの鶯

（『教長集』四）

が挙げられる。そしてこの涙の解凍を人事に援用する例も見られる。

節分のつとめて、ある女に

西へゆく風もあらなんぬれごろも ひとみこばるる涙 とかせん

（『為信集』一九）

立春

としくれし 涙のつらら とけにけり苔の袖にも春やたつらん

（『俊成集Ⅰ』（『長秋詠藻』）四八五）

更には次のように、人の心の「こほり」の解凍を詠む例も見られる。

春二首　此日則立春也

氷とも人の心 をおもはばや今朝たつ春の風にとくべく

（『能因集Ⅰ』一）

これらの歌の場合、『古今集』四番歌は必ずしも出典歌として位置づけられないが、「東風解凍」が意味する自然界の解凍を生き物の涙に結びつける発想を創出した『古今集』四番歌は、先蹤歌として重要な意味をもつと言えよう。

平安和歌の立春詠における東風解凍の歌を一通り読み通すと、解凍の主体である氷の表現に、豊富なバリエーションが存在していることがわかる。

又、春たつ

山みづの氷 とけつつはるくればぬるきかぜにもはやきなりけり

（『重之集』三九）

立春

月よめばけふははるたつひなりけり あしまの氷 とけやそむらん

（『行宗集』一八三）

花園の左大臣仁和寺にて、立春のあまた人人によませられ侍りしに、よめる

山ざとは たな井の氷 とけ行くに春きにけりとみてしるかな

（『俊恵集』三）

立春　　顕輔

春たつと水のおもにぞ聞きそむる かけひの氷 とくるやま里

（『実国家歌合』六）

など、様々な「こほり」が詠出されている。そして解凍するのは単なる「こほり」にとどまらず、

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき、立春をよめる

みよしののやまぢのゆき をけさみればとくるやはるのしるべなるらん

（『教長集』五）

立春　　頼政

めづらしき春にいつしかうちとけてまづ物いふは 雪のした水

（『実国家歌合』八）

春たつ心を

今朝みれば のきのたるひ もとけにけりしのぶ草に春やたつらん

（『実家集』二）

のように「雪」や「軒のたるひ」、また前掲俊成歌に見られる「涙のつらら」（『俊成集Ⅰ』四八五）なども詠まれている。

一方、解凍の描写は、前掲例の傍線部からもわかるように「とく」が多数を占めるが、氷面が割れる現象を表す「ほろこぶ」や、解凍後の増水に着目する「もる」、解凍後の水音に注目する「音まさる」など、いくつかの異なる表現も見られる。

あをやぎのいとよりかくる春くれば いけのこほり もほころびにけり

（『重之集』四〇）

春たつ日

今朝みればみねに霞はたちにけり 谷の下水 いまやもるらん

（『忠通集』一）

春たつひ、ある所のおほせごとにて

うは氷 とくるなるべし山川のいはまく清水音まさるなり

（『重之子僧集』一）

こうした解凍描写の多様さに比して、解凍という現象をもたらす「風」がよまれることは少ない。前掲の例を見ても、風が詠まれた例よりも、詠まれていない例のほうが多いということがわかる。無論、「解凍」という現象が視覚、聴覚を通じて確認できるのに対し、それをもたらす「東風」は表現の幅がやや狭いということも、一つの理由ではあろう。しかし多くの東風解凍詠の中に「風」が詠まれていないのは、当時の人々にとって「解凍」が「東風」によってもたらされることが自明であったためとも考えられる。「解凍」の背後に「東風」が存在していることは、具注暦の知識を持つ人間ならば言われずとも知っていたはずで、「解凍」を詠む度に「それを引き起こすのは東風だ」と明言する必要はなかっただろう。

をしのゐる 池の氷 のとけゆくはおのがはぶきや春の初風

（『俊成集Ⅰ』四八四）

その風を敢えて鴛鴦の「はぶき」と捉えたこの歌の興趣も、そうした自明の前提があればこそ、成り立っていると言えよう。

次に、かすみを詠む立春詠を見たい。立春のかすみは、『萬葉集』に由来する立春詠の最初の題材であり、勅撰集にも多く採られている。勅撰集に入集することの少ない東風解凍詠とは対照的と言える。東風解凍の特徴を念頭において平安和歌の立春かすみ詠を見渡すと、景物の主体である「かすみ」の表現のバリエーションは比較的に少ないということが分かる。「東風解凍」における「解凍」の主体が「こほり」、「ゆき」、「たるひ」、「つらら」、解凍の描写が「とく」、「ほころぶ」、「もる」、「まさる」などを通じて表現されるのに対して、立春かすみ詠の表現は動詞「かすむ」と名詞「かすみ」という二語でまとめることができる。動詞「かすむ」の例に関して、その表現上のバリエーションは、「かすめる」（『後拾遺集』春上・四）、「かすむらん」（『俊恵集』七）のような助動詞の差が見られる程度である。名詞「かすみ」に関しては、一般的に使用されている「かすみ」のほか、「春霞」（『新撰朗詠集』巻上・春・七）、「朝霞」（『教長集』二）、「八重霞」（『教長集』一〇）、「霞の衣」（『玄玉集』巻四・時節歌上・三四九）なども見られる。その「かすみ」の状態を表す動詞に関していえば、「たつ」の用例がもっとも多く、そのほか「たなびく」（『後拾遺集』春上・五など）、「たちかはる」（『金葉集』三奏本、一）、「わたる」（『西行集Ⅰ』七）、「着る」（『親盛集』一）、「かかる」（『俊成集Ⅰ』

二〇二）、「く（来）」（『俊成集Ⅰ』四八二）などが見られる。また「かすみひとむら」（『玄玉集』巻四・時節歌上・三五四）という表現も一例見られる。

平安和歌における立春のかすみを詠む歌を見渡すと、その最も注目すべき特徴は、多彩な地名、歌枕が見られる点である。一覧すれば、「吉野山」（『古今集』春上・三）、「音羽山」（『後拾遺集』春上・四）、「小野山」（『覚性集』）（『出観集』）五）、「二見の浦」（『覚性集』六）、「淡路島山」（『俊恵集』五）、「難波の潟」（『経盛集』一）、「逢坂の関」（『惟方集』二）、「みかきの原」（『教長集』二）、「末の松山」（『教長集』八）、「須磨」（『経正集』一）、「明石」（『経正集』一）、「香具山」（『親盛集』一）、「ふじの嶺」（『実国家歌合』三）、「三輪の杉原」（『実国家歌合』九）、「志賀のわたり」（『実国家歌合』一九）、「賤機山」（『月詣集』巻一・正月・二）などが挙げられる。

ここで想起したいのは、「かすみ」を詠んだ『萬葉集』巻十の巻頭歌群である。ここにも「天の香具山」（一八一二）、「巻向の檜原」（一八一三）、「巻向山」（一八一五）、「弓月が岳」（一八一六）、「朝妻山」（一八一七）、「朝妻の片山崖」（一八一八）などといった、具体的な地名が示されている。「かすみ」は日本独自の季節感を持つ景物であり、東風解凍に比べ、在来的な性格が強い。その在来性から、具体的な地名とセットにする詠法が生まれた考えられる。「立春霞詠」における景物の主体及び動作に関する表現が限られている一方で、「かすみ」の在来性を生かした地名、歌枕のバリエーションによって、平安和歌における「立春霞詠」は展開していくのである。

東風解凍、立春のかすみに次ぐ題材は立春の鶯である。その中には、さらに『古今集』四番歌に由来する「鶯の涙」を詠むものと、

鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰かつげまし
（『寛平御時后宮歌合』二二）

春のはじめの歌　壬生忠岑

春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふ
（『古今集』巻一・春上・一一）

に由来する、「春を告ぐ鶯」[14]に二分される。「鶯の涙」を踏まえた歌については、既に見たので、ここでは「春を告ぐ鶯」について見たい。

立春の日、又ゆきふる

はるごとに鶯のみぞしらせけるとりのはらにやはなもこもれる
（『重之集』七七）

花園の左大臣仁和寺にて、立春のあまた人人によませられ侍りしに、よめる

春来ぬと人こそいはめいつのまにけさ鶯の宿に告ぐらむ
（『俊恵集』一）

右大臣家人人に百首歌よませられ侍りしに、読めとありしかば、おなじ題を五首

としのうちにさきにし梅に今日よりぞおのが春とも告げよ鶯
（『俊恵集』一二）

立春

はるきぬとけさぞつぐなるうぐひすはねぐらの竹に一夜すぐして

（『公重集』（風情集）三〇三）

右の四首は、いずれも鶯によって春が告げられたことを詠むものである。俊恵歌にはこれといって新しい表現が見られないが、重之歌の「とりのはらにやはなもこもれる」は和歌に先例が見出し難い新しい表現である。一方公重歌の「ねぐらの竹に一夜すぐして」は院政期以降の歌の中に複数の例が見られる表現で、一例として『堀河百首』「竹」題の藤原顕仲歌、「うぐひすのねぐらにしむるなよ竹はいづれの枝かふしどなるらん」（一三二二）が挙げられる。

そのほか東風解凍、かすみ、鶯以外の景物を詠む歌もあるが、どれも数は少なく、平安和歌に見られる立春風景作の主流を占めているのは、『古今集』に詠まれたこの三つの景物であると言える。

第四節　立春詠の周辺

立春詠は春の巻頭に位置するにふさわしい題であるが、春の巻頭に位置づけることのできる唯一の題材ではない。平安和歌の立春詠以外の、春のはじめを意味する題材（初春題）を調べると、その中には、立春詠と類似する歌表現を持つ歌が少なからず存在することがわかる。このような歌の先例は『古今集』四番歌である。この歌の詞書に見られる「春のはじめ」という題は、多くの平安和歌に使用されている。

春のはじめ

春日野にけふもみ雪の降りしくは雲井に春のまたやこざらん

（『深養父集Ⅰ』一）

中には立春か、元日か、それとも春の始まる頃を詠んだものかが判別し難い例もある。次に掲げる歌は「はつ春」の例である。

おやの家のぞうしずみにて、人人歌よむに、はつ春のこころ

去年の冬今年の春の徴には山の霞ぞたちへだてける

（『輔親集Ⅰ』二）

「春の徴としての霞」を明確に踏まえ、自然暦の季節感を第一義とする方法を用いた歌である。これは後に重要な季節歌題となった「初春」をテーマにした初期の作品であるが、その中に立春の意識が含まれているかどうかは判断し難い。この「はつ春」の題は『金葉集』三奏本巻頭歌などにも見られる。

言葉の意味から言えば、「立春」という特定の日を指す「春たつ」は限定的な表現であり、「春のはじめ」、「はじめの春」、「はつ春」は春の始まる頃とも解せる汎用的な表現である。だが実際の歌を見ると、両者の境界線は必ずしも明確なものではない。『好忠集Ⅰ』の「春のはじめ」と題する歌にある次の三首はその例である。

みしま江につのぐみわたる葦のねのひと夜ばかりに春めきにけり

（三）

あなしがは春山かけてくる春のしるしとけさは水ぞぬるめる　（四）

なるたきのいはまの氷いかならし春のはつかぜよはにふくなり　（五）

傍線部が示すように、この三首は春の始まる特定の日を意識したものであるが、『好忠集Ⅰ』（毎月集）の部立からみて、これは孟春月の一日を詠んだものとみられる。元日を春の始まる日とする捉え方は、ほかにも、

睦月の朔日、雪のふりけるに　藤原範永

春のたつしるしは見えで白雪のふりみまさる身とぞ成りぬる

（『続詞花集』巻十八・雑下・八六六）

元日　仲実

万代の春のはじめの今日しよりつかへまつらん年にあひつつ

（『永久百首』春・二）

に見られる。さらに元日に分類された歌の中にも「春の徴としてのかすみ」を詠んだ、

ついたちの日　源重之

よしの山みねの白雪いつきえて今朝は霞のたちかはるらん

（『古今六帖』第一帖・春・一七）

などが見られる。元日の風景と立春の風景とは、もはや詞書なしでは見分けられなくなっている。なおこの歌は、「はつ春のこころをよめる」という詞書をもって『金葉集』三奏本の巻頭歌に選ばれている。

ここで注目したいのは、元日歌と立春歌との混同が見られるという点である。『堀河百首』に収められている俊頼の立春歌「庭もせにひきつらなれるもろ人のたちゐる今日やちよのはつ春」が、彼の私家集『俊頼集Ⅰ』の巻頭に据えられているが、その詞書は「堀河院御時百首歌めしけるに元日の心をつかうまつれる」（一）となっている。この歌を康和五年元日詠とする推論が大井洋子氏に見られるが、確かなことはわからない。[15] そして俊頼が単独撰者となって編纂していた『金葉集』においても同じ現象が見られる。即ち『堀河百首』に収められている顕季の立春歌「うちなびき春はきにけり山川間の氷今日やとくらむ」（五）は『金葉集』二度本、三奏本のいずれにも入集しているが、二度本の詞書は「堀河院の御時百首歌めしけるに立春の心をよみ侍りける」（一）であるのに対して、三奏本では「堀河院御時百首の歌めしけるに元日の心をつかうまつれる」（二）となっている。部立の整合性を考慮した撰者の作為なのか、三奏本の段階で元日となるテキストからそれをとったのかは不明だが、当時の季節観における立春詠と元日詠との境界線の曖昧さの一端が窺われよう。

春のはじめと関連する題はほかにも「早春」、「初春」などがあげられる。

早春の心をよめる　太宰大弐長実

いつしかと春のしるしに立つものは朝（あした）の原の霞なりけり

（『金葉集』二度本、巻一・春・六）

初春

岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水みちもとむらん

（『西行集Ⅱ』（西行上人集）一）

ここに「春の徴としてのかすみ」や「東風解凍」が詠まれている点からも、これらの歌における季節表現と立春詠のそれとの差が、必ずしも明確なものではなかったことが分かる。

一方で景物や地名をテーマとする歌の中にも、立春詠の表現と類似する歌が存在する。詠物歌題として『萬葉集』に登場するかすみがその典型的な例である。

霞を詠む

昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり

（『萬葉集』巻十、一八四三）

平安和歌では、勅撰集に入集することの多い立春のかすみが、私家集に登場する時期はかなり遅い。しかしそれは「春の徴としてのかすみ」が一般的に詠まれていなかったということではない。立春が題詠として定着する以前の段階において、その題材は主に「かすみ」を題とする歌の中で詠まれていたためである。

右方を、また霞

あさみどり春をきぬとやみ吉野の山の霞のおびにみゆらん

（『忠見集Ⅰ』七〇）

霞

霞だにたちおくれせば春きぬとなにをしるしに人もしらまし

（『能宣集Ⅰ』六八）

霞

みよしのは雪ふりやまずさむけれど霞ぞ春のしるべなりける

（『麗景殿女御歌合』二）

右の三例はいずれも「春の徴として霞」を詠んだものである。そのほかにも、

よしの山

よしの山雪かふあともたえにしを霞ぞ春のしるべなりける

（『中務集Ⅰ』二二）

のような例が見られる。立春詠における「霞」は、これらの歌の蓄積によって形成されたものと考えられる。

このように、平安和歌の立春詠の周辺には、それと類似する表現や方法を使用した様々な初春詠、景物詠、名所詠が存在する。その中には、実際に立春を意識した歌も存在していると考えられるが、立春詠とほかの初春詠との境界線が曖昧である以上、それと断定することは困難である。しかしそういった歌の中には立春詠の先蹤歌、あるいは派生歌が少なからず存在することは確かであろう。平安時代における立春詠の流れは、決して元日やその他の初春題材との差異を際立たせながら成り立ったものではなく、むしろ初春題材という大きな括りの中で、融合混同しながら発展していたのである。例外として、年内立春詠という暦法の知識を要する題材だけは、独自の表現を求めて発展を遂げていた[16]。しかし、結果としてこれだけの数の立春詠が残されたのも、歌人達が「立春」にとりわけ関心を持った結果というよりも、『古今集』の配列による影響が大きいと見られるのである。

おわりに

立春は中国の太陰太陽暦に由来する概念であるが、平安和歌

の立春詠の展開は、『古今集』の季節詠を土台とするものである。その流れを汲んだのちの立春詠を見ると、そこにおける中国文学の影響は必ずしも強いものではない。『古今集』巻頭歌が提示した「かすみ」、「東風解凍」、「うぐひす」が後世の立春詠の主な題材となった点からみて、やはり『古今集』を源とする和歌独自の典拠の伝統が認められる。

そもそも中国とは異なり、日本における立春は特に重要な年中行事があったわけではない。本来立春日に行われてきた「若水」の伝統も、やがては元日に移ってしまうことから見て、和歌における「立春詠」はほとんど現実的な基盤を持たない題材と言える。そのことは平安後期に見られる立春詠とその他の初春詠との交錯からも見て取れる。その段階において立春は、「元日」との間に明確な違いを持つ暦法の概念から「初春詠」の代表的歌題へと変わったのである。従来の和歌注釈では暦法の知識を用いて「立春」歌を解説することが多く行われてきたが、前述のように、平安中後期になると「立春」の詞書を持つ歌であっても、歌の表現内容は暦法上の「立春日」を強く意識したものとは限らない。『古今集』巻頭歌のような、明確な暦法知識を持ち出さない限り、「立春詠」と「元日」やその他の初春題材との間には、はっきりとした境界線があるとは言い難いのである。このことは、漢文化に由来するコンセプションが日本において独自の進化を遂げ、やがて新しい詠作の伝統を生み出した例として、再評価すべきであろう。

注

(1) 新井栄蔵氏「春立ちける日―古今集巻頭歌私見―」(『文学』四四―二、一九七六)、神尾暢子氏「在原元方の立春映像」(『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二)など。

(2) 調査範囲の下限は用例の検出に用いた二つのデータベース(『新編国歌大観』『新編私家集大成』)において、平安時代と分類されている作品集までとする。

(3) 「それに準じる歌」は、季節の配列意識が認められる歌集において、立春関連詠作の前後に位置し、かつ題が明確でない歌を指す。

(4) 「はるたつ」の語源に関する諸説の検討は、小島憲之氏「漢語の摂取―漢語「立春・立秋」と「春立つ・秋立つ」など―」(『萬葉』一三五、一九九〇)に詳しい。

(5) 『新編私家集大成』解題(『貫之集』萩谷朴氏・奥村恒哉氏、田中登氏(新編補遺)、『友則集』奥村恒哉氏、久保木哲夫氏(新編補遺))。

(6) ただし作歌日時の明らかではない歌にも「霞立つ野の上の方に行きしかば鶯鳴きつ春になるらし」(巻八・一四四三丹比乙麻呂)のような例は見える。

(7) 目加田さくを氏・中井一枝氏・堀志保美氏『小侍従集全釈』(新典社、二〇〇五)。

(8) 詞書から見れば立春詠は二番歌までとなるが、後述するように、三番歌と四番歌とが後の立春詠に与えた影響は大きい。

(9) 滝川幸司氏『天皇と文壇――平安前期の公的文学』(和泉書院、二〇〇七)第三編第四章。

(10) 内田正男氏『暦の語る日本の歴史』(吉川弘文館、二〇一二)第五章第三節。

(11) 長保元年十二月二十二日、寛弘元年正月七日などがその例である(近衛通隆氏監修『御堂関白記(一)』思文閣出版、一九八三)。

(12) 本節において引用された東風解凍の歌の囲み線部は解凍の主体(解凍前のものか、後のものかについては区分せず)を、傍線部は解凍の描写を表す言葉を示す。

(13) 「若水」については隋源遠「紀貫之「袖ひちてむすびし水」の解釈」(『日本語と日本文学』五〇、二〇一〇)参照。

(14) 第二節に見たように、その先蹤は『萬葉集』にも見られる。

(15) 大井洋子氏「散木集の二首をめぐって」(『和歌文学研究』二五、一九六九)。

(16) 隋源遠「平安朝における年内立春詠の展開」(『和歌文学研究』一〇六、二〇一三)。

[引用本文]

『萬葉集』は『萬葉集CD-ROM版』(塙書房、二〇〇一)、全ての私家集は『新編私家集大成』(古典ライブラリー版)、その他の歌集(勅撰集、私撰集、歌合、定数歌集)は『新編国歌大観』(古典ライブラリー版)、『礼記』は『十三経注疏』(芸文印書館、一九七九)に拠った。なお漢字、仮名については一部私に改めた。

[付記]

本稿は、中古文学会平成二十九年度秋季大会(於静岡大学、平成二十九年十月二十九日)での口頭発表に基づき、隋が初稿を作成し、茂野が加筆修正を施したものである。席上、ご教示頂いた諸先生方に感謝申し上げる。なお、本稿は中華人民共和国教育部人文社会科学研究青年項目『平安時代和歌勅撰伝統研究』(18YJC752030)の助成をうけたものである。

(ずい　げんえん　華東師範大学講師
しげの　ともひろ　筑波大学特任研究員)